

慰霊祭のご案内を頂きました。

残念ながら、出席できませんので、私と貴大学との係わり合いを一言だけ述べさせていただきます。
最初にお世話になったのは、1996年であったかと思いますが頸椎の手術でした。

次にお世話になったのは2002年3月14日午後2時ごろであったと思いますが、救急搬送でした。
私は当時尼崎に住んでおりましたが、大震災当時から私が世話をしていた人物に、私と妻とが刃物で襲われ、瀕死の重傷を受け、妻は関西労災病院に搬送され、私は貴病院に救急搬送されました。
そのとき執刀していただいた先生のお名前は申し訳ないことに失念しましたが、先生から「酷くやられているな」といわれたことは覚えております。私は全身15箇所をナイフで刺され、肺が露出していたようで、私に付き添ってくれた娘の夫が、後に「正視に耐えなかった、助からないのではないか、と思った」というほど、酷い状態であったようです。女性の麻酔医の先生に「麻酔しますよ」と声をかけられ、その後は意識がなくなりましたが、翌日気がついたときは痛みも無く、「耳がちぎれかけていたので、つけておいた」と先生からいわれて「助かったんだ」と気が付きました。
労災病院に搬送された妻は一時蘇生したようですが、結局死亡しました。
私はその後、約2週間貴病院にお世話になり転院しました。

その後、私は犯罪被害者として、全国犯罪被害者の会（あすの会）の一員となり、同じように犯罪被害にあって経済的、精神的、肉体的に苦しんでいる人たちと共に犯罪被害に遭った人たちの刑事司法での権利拡充、犯罪被害者の国による経済補償の充実のため微力を尽くしています。

事件から23年、私の加害者は10年の刑期（アルコール幻覚症による心身障害で刑期半減）を終えて出所し死亡、私も95歳になりました。

あの時、あの先生にめぐり合わなかったなら、私のその後の23年は無かったと思います。

私が貴病院に献体をしようと考えたのは、この事件の後です。そして、私の妻の姉も2019年4月27日、貴病院で死亡し献体しています。

このようなすぐれた先生のことを国手と呼ぶそうですが、私にとっては全宇宙を私にさづけてくださった先生です。若し、先生やご家族の方に連絡が出来ましたら、私が感謝し、その後23年間も生きていることをお伝え下さい。

貴病院が今後も役割を果たしてくださることを期待しております。

2025年7月31日